刻む会たより

No. 27

2003.12.01

長生炭鉱の“水非常”を
歴史に刻む会
代表　山口武信
宇部市常磐町一－一－九
〒〇八二六（二一）八〇〇三

ピーヤは今、何を思う・・・

～長生炭鉱フィールドワークに参加して～

楠町　橋本嘉美

二〇年前のことです。宇部空港近くの海で遊んでいたとき、突然、夫が叫んだのです。「あ、あれは確か炭鉱の排気坑だ。大きな事故があって大勢の朝鮮人が死んだって聞いたことがある」・・・海の底に炭鉱？しかも「落盤事故で多くの犠牲者が出て、遺体はまだ海底に眠っている」と夫は言うのです。

当時、京都・丹後育ちの私にとって、山口の歴史・文化は知らないことばかり。そんな私を、夫はあちこち案内してくれていました。

それ以来、海底から突き出ている２つの排気坑「ピーヤ」が、私の脳裏から消えることはありませんでした・・・いつか、この事故について詳しく知りたい。

そして、今年の夏、フィールドワークに参加させていただき、その思いを遂げることができました。

一連の行事の中では、とりわけ紙芝居を興味深く見ました。事故当時、海から白い波が立ったという場面は、痛ましさに胸が苦しくなるほどです。歴史を刻む会が「長生炭鉱の水非常」を後世に伝えるために地道に活動されてきたこともわかりました。異国におられる殉難者の家族は、このような会の活動に「日本人の良心」を見て、きっと心を慰めておられることでしょう。

最後に、現場近くの海に出てみると、この会を象徴しているかのように、長年、波にもまれながらも壊れることなく踏ん張ってきた二つのピーヤがありました。ピーヤは今、何を思っているのだろうか・・・不幸な歴史を乗り越え「日朝の友好と平和」を願いながら海に花をささげました。

二〇〇三年 夏のフィールドワーク

今年は、戦争を身近な問題として考えて頂きたいという想いから、イラク戦争関連の写真展示を同時に行いました。

また、参加者の方々にも位牌を手にとって並べて頂きました。水非常の犠牲者一人一人の想いを感じて頂けたと思います。

また、海岸でピーヤを見ながら簡単に説明をした後、献花をして、犠牲者に黙祷をしました。

『高暮ダム強制連行を調査する会』
念願の遺骨返還・謝罪碑建立がかなう！

八月二〇日から二二日、韓国天安「望郷の丘」（同胞の方が異国でなくなり身寄りのない故人が安置される場所）で、念願の納骨法要と謝罪碑除幕式が、日韓合わせて一二〇余名の参加のもと行われました。

納骨と謝罪碑が実現したのは、宗教関係者、平和団体関係者、各労組団体とその関係者の皆さんそして各個人の方々のカンパによるものです。また、戦争責任問題で知り合った李金珠さん、韓国挺身隊問題対策協議会「朴世榮」さんを始め平和運動を通じて知り合った韓国の友人からの励ましや助言、提言は私たちに勇気と心の支えとなりました。また、在日を始め「望郷の丘」の関係各所氏のご尽力を得て実現しました。あらためてお礼と感謝を申し上げます。

法要は、「会」代表福政康夫氏が、遺骨返還と謝罪碑建立にむけた想いを述べ、日韓合同の読経のなか、参加者が次々と献花しました。

参加者の中には、韓国から高暮ダムを尋ね案内した方、平和活動で出会い、知り合った方々の顔も見受けられ、共に共鳴し合っていることと感じました。

また、このたびの事業でいくつかの反省と教訓を体験しました。一つは、謝罪碑文で、文言と内容、表現は歴史的認識の違いによるものでありました。二つ目は、日本国（政府）による戦争責任・戦後補償を求める韓国側の民衆団体からの声でした。

この事業は、私たちは加害民族として、お詫びと反省の行動でありますが、ひきつづき政府へ戦争責任追及・謝罪と補償を求めた運動を取り組んでゆきます。

謝罪碑文

一九四〇年三月一五日、日本国広島県比婆郡高野町高暮に、日本発送電株式会社（現中国電力株式会社）と奥村組によって、当時としては、中国地方最大の『高暮ダム』起工式が行われた。

建設工事は、一九四九年一二月までの約一〇年の歳月をかけて完成した。

この間、一九四〇年の夏から秋にかけて二千人とも四千人とも言われている韓半島出身の労働者が送り込まれて、人間性を蹂躙した過酷な労働を強いられた。労働者たちは、遠い祖国への限りない望郷の念を抱きながら、病に倒れ、また、ダム堰堤の生コンの中に、その命を埋めていったという。

わたしたちは、このような強制連行、強制労働の事実の調査と共に、ダム周辺の山野に棄て去られた犠牲者の遺骨を探しながら、発掘を続けてきた。

ここに、私たち日本人が犯した強制連行・強制労働の非人道的な罪を、心から謝罪する証として、一九一〇年八月二一日、植民地支配を、名実ともに強制して以来、九三年を経た今日、ｓｙざいひを建立させていただいた。

二〇〇三年八月二二日

日本国・広島県

『高暮ダム強制連行を調査する会』

※『高暮ダム強制連行を調査する会　発行「高暮第一二号」より抜粋

ピーヤの慟哭

西岐波は風の強いところ
雨の日も　雪の日も
晴れの日もピーヤから
かすかな慟哭が洩れてくる

今から六〇年も前のこと
あツという間の水非常で
一八三人もの人々が
ゴーツと押し寄せた海水に
狭く真暗な坑道から
逃げ場もなく叩き付けられた

あの日重い足取りで
家族のために鶴嘴を
担いで入った坑道が
水の地獄になろうとは
それと分かっていたならば
誰も下りる者などいなかった

阿鼻叫喚もあらばこそ
非情な水が坑内を
隈なく侵す数分を
平然と命奪った人災の
仕打ちをピーヤは知っている

黒いダイヤを掘り上げて
日に増すマメを数えつつ
早く故郷へ帰りたいと
語り合っていたアボジとオモニ

ささやかな夢は一瞬に
潰え破れて床波の
ピーヤの周囲に盛り上がる
高い水柱と水飛沫が
噴流となり水面を走る
あとは泡立つ浪ばかり・・・

岸辺に広がる青海原に
大きな船がゆったりと
長い航跡を曳いて行く

冷たい坑道にいるアボジの
故郷へ還りたい想いを
叶えてもらえないものか
ピーヤは波間に顔を凹し
今日もただじっと見つめている

〇三・一一・二〇　岡野清

※岡野清氏は現在西岐波にお住まいで、最近事務局会議に参加下さっている方です。今回、長生炭鉱の水非常のことを詩にして下さいましたので、皆様にご紹介致します。

二〇〇四年 遺族招へい 追悼式のご案内と カンパのお願い

年が明けて二〇〇四年も韓国から一〇名程度の遺族をお招きして一月三一日（土）午後一時三〇分から、第一三回目の追悼式を行うことになりました。ご多忙とは存じますが、是非御参集下さり、遺族と共に海底に眠る犠牲者を追悼していただければ幸いです。

また、一〇名の御遺族をお招きするために、約一〇〇万円程度の費用が必要となります。私達の運動をさらにご支援下さり、カンパをお寄せ頂きたくお願いを申し上げます。

証言を綴る！①

★姜福徳（松本スエ子）さん

小野田市千崎東

姜さんは、1937（昭和12）年、結婚して、海を渡って西岐波の長生炭鉱にやって来て、1939（昭和14）年秋まで、そこで生活した。

当時、朝鮮人の労務係の、日本名を山中という人と、鉱夫で日本名を田村といった二人の人物でした。

当時の長生炭鉱の納屋は周りを板で囲われていて、飯場は更に又板囲いがされていて、刑務所のような処で、同朋の番人が人の出入りを監視していた。

1939（昭和13）年頃の話であるが、世帯持ちで納屋に住んでいた男、刃論朝鮮人であるが、「自分は身体が弱いので、仕事に耐えられないから、暇を貰いたい。」と言ったところ、事務所に連れて行かれて、入口の戸の鍵をかけられて、3人の労務の者が、棒で叩いては水をぶっかけ、また棒で叩いて、死ぬ目に遭わせていた。姜さんがそのことをその男の嫁さんに知らせに行くと、その嫁さんは事務所の窓ガラスを棒で叩き破って、「自分も一緒に殺してくれ！」と叫んでいた。労務の者はその嫁を棒をもって追っ払ってしまった。

1938（昭和13）年だったが、私が納屋の道を歩きよったら、労務の西村が、「今、水が出たと嘘を言うてお前の親父が労務でどつかれよる。」と言うたので、労務の事務所に行ったら、何事も無かった。「西村があんたをかもうたのいね。」と他人に言われた。

（※「かもうた」→「からかった」の意）それまでも「チカチカ水が洩る」というて主人は坑内から上がってきていた。それでも、他人には、水が出たと言うと殴られるから水が出ても、具合が悪いとか、急病とか言うて、仕事を止めて坑内から上がってきよった。

1939（昭和14）年秋の頃だった。主人と相談をして、長生炭鉱から逃げ出すことにした。先に、主人を厚南炭鉱の兄のいる所に逃して、後から私は子供を連れて逃げて行くことになっていた。計画通り、主人は厚南炭鉱の兄を頼って逃げて行った。主人が居なくなったのを知って、労務の者が来て主人の行き先を聞いて責めるので、今5歳になる女の子が、まだ赤ん坊だったので、背負うて、朝早く床波駅に出た。ところが、誰かが門番に告げ口をしに行ったらしく、私の乗る電車がそこまで来ているのに捕まってしまった。そして労務の事務所に連れて行かれて、「お前は親父の処に行くんじゃろう。どこに行っちょるか言え！」と朝も食べていなかったのに、昼食も抜かれて、その上夜になってもまた責められた。そうするうちに山中と田村（二人とも朝鮮人）が相談して、山中が「乳呑み児を連れていっちゃぁ大変だろう」と言ってくれて、田村の家に連れて行かれて、ご飯を食べさせてもら

った。食べた後で、田村が「便所に行くからというので、外に出したと言っておくこと言って逃してくれた。私は床波駅でなく、常盤駅へ道を急いで逃げた。

長生炭鉱では、その間も主人の行方を人を遣って探していた。主人は長生炭鉱の時と同じ名前で働いていたので、長生炭鉱の者が主人の居場所を探し、ある日、兄の家で主人が昼飯を食べていたところ、長生炭鉱の男が二人やって来た。主人は、長生炭鉱から探しに来たということを聞いて、昼飯は食べかけのまま家の裏から逃げ出して、小野田の有帆の萩森炭鉱に移った。萩森では名前を変えて働いていたので、二度と追われることはなく、戦後まで萩森で働くことができた。

※これまでに山口会長の収集した証言を、今後「刻む会たより」で紹介していきます。

海に沈んだ炭鉱 フィールドワーク

2004年
日時：8月7日（土）
午前10時～
場所：宇部市西岐波
浜中集会所（ビーヤの海岸近く）にて

参加費無料！

フィールドワークの内容

①参加者全員でお話をしながら犠牲者の位牌を並べます。
②紙芝居「アボジは海の底」
③ビデオ上映
④献花（海岸でお花を供えます）